



Title	様々な属性の目撃証人の信用性に関する調査
Author(s)	名畑, 康之; 仲, 真紀子
Citation	Technical report, 73, 1-12
Issue Date	2016-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64375
Type	technical report
File Information	73.pdf



様々な属性の目撃証人の信用性に関する調査

名 畑 康 之

仲 真 紀 子

DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY
HOKKAIDO UNIVERSITY
SAPPORO 060-0810 JAPAN

様々な属性の目撃証人の信用性に関する調査¹

名畑 康之² 仲 真紀子³

北海道大学大学院文学研究科

概 要

本研究では、年齢（3, 5, 10, 15, 50, 70 歳）、人種（白人、黒人、アジア系、イスラム系）、障がい（視覚障がい、聴覚障がい、発達障がい、知的障がい）、容姿（好ましい、好ましくない）、社会的地位（高い、低い）の5つの属性カテゴリ、計18項目の属性を設定し、これらの属性の目撃証人の信用性について調査した。参加者には、各属性の証人が法廷で証言する場面を想定してもらい、各属性の証人が、基準とした属性（例：年齢カテゴリでは20歳）に比べてどの程度信用できるかを判断させた。加えて、そのように判断した理由についても記述させた。3つの属性（50歳、容姿が好ましい、社会的地位が高い）を除いて、その他の属性は基準とした属性よりも信用性が低かった。信用性が特に低かった属性（5歳、知的障がい）の特徴を掴むため、同じ属性カテゴリで信用性が低くなかった属性（70歳、聴覚障がい）と判断理由について比較したところ、多面的な理由が挙げられることが明らかになった。本研究により、証言の信用性判断に関する研究などで利用可能な属性の信用性データが得られた。

キーワード：目撃証人 信用性 属性

¹ Judging the credibility of eyewitnesses with different attributes

² Yasuyuki Nabata
Department of Psychology, Hokkaido University

³ Makiko Naka
Department of Psychology, Hokkaido University

目撃証言の信用性判断に関する数多くの研究では、目撃証人がどのような人物であるかによって証言の信用性が異なることが示されてきた。例えば、子どもによる証言は大人による証言よりも信用性が低く判断されることが報告されている (e.g., Bruer & Pozzulo, 2014; Goodman, Golding, Helgeson, Haith, & Michelli, 1987)。その他には、知的障がい者による証言が健常者による証言よりも信用性が低く判断されることも示されている (e.g., Peled, Larocci, & Connolly, 2004; Stobbs & Kebbell, 2003)。このように、先行研究では、実際の裁判で証人となる可能性が高い属性（例：大人，健常者）を基準とした場合、特定の属性を持つ証人の証言は、信用性が低く判断されることが示されてきた。

上記の研究では、特定の属性を持つ証人の証言の信用性が低く判断される理由について、その属性の特徴に基づいて説明が行われてきた。その一方で、個別の属性によらない、証言の信用性が低く判断される統一的な心理過程については必ずしも明らかではない。こうした問題に取り組むにあたり、証言の信用性が低い属性の中でも、特に低い属性に着目することによって、なぜ証言の信用性が低いと判断されるのかを明らかにできるのではないかと考えられる。ただし、これまでの研究では、研究ごとに設定する事件や属性が異なっており、どの属性の信用性が相対的に低いのかは不明である。様々な属性の信用性を整理することは、信用性が低く判断される統一的な過程を明らかにする上で重要であると考えられる。

そこで、本研究では、様々な属性を設定し、それらの目撃証人の信用性に関する質問紙調査⁴を行うことで、目撃証言の信用性判断に関する研究などで利用可能な属性の信用性データを提供することを目的とした。加えて、信用性が特に低い属性に着目し、その属性がどのような特徴を持つのかについて、同じ属性の種類（以下、属性カテゴリと記す）（例：年齢，障がい）の中で、信用性が相対的に低くない属性との比較を通して探索的に検討した。これにより、証言の信用性が低く判断される要因について何らかの示唆を得られると考えられた。

本研究では、先行研究において、基準とされた属性（例：大人，健常者）に比べて、証言の信用性が低くなるような属性が含まれる年齢，人種，障がい，社会的地位を属性カテゴリとして取り上げた (Ross, Dunning, Toglia, & Ceci, 1990; Jules & McQuiston, 2013; Frumkin, 2007; Stobbs & Kebbell, 2003)。また、実証的研究は行われていないものの、信用性が低くなると考えられている属性が含まれる容姿につい

⁴ 目撃証言の信用性判断に関する研究では、このような手法が一般的に取られる (e.g., Goodman et al., 1987)。これは、実際の法廷で証人を見ながら判断させるような方法では様々な要因が存在し、それらの影響を統制することが困難であるためである。属性自体が信用性に及ぼす影響を明らかにするためには、その他の要因の影響を可能な限り統制することが重要である。

でも加えた (FifeSchaw, 1995)。次に、各属性カテゴリに含まれる様々な属性を設定した。そして、属性カテゴリごとに基準となる属性を設定し、その信用性を 50%とした際に、判断対象となる属性の信用性がどの程度かを調査参加者に判断させた。さらに、証言内容が信用性を変化させる可能性を排除し、様々な属性の証人が、目撃証言を行った場合の信用性のみを捉えるため、参加者には個別具体的な証言内容を提示しなかった⁵。

方 法

参加者

大学生、大学院生⁶40名（男性25名、女性15名、平均年齢22.10歳、 $SD=4.03$ ）が参加した。このうち、大学生20名は北海道大学大学院文学研究科心理システム科学講座が運営する参加者プールに登録されていたものであり、第1著者が電話またはメールで調査協力を依頼した。また、その他の大学生及び大学院生20名は先述の参加者プールに登録されていない第1著者の知人であり、個別に調査への参加を依頼した。

材料

事件及び裁判の争点が記載された用紙、証人の信用性を判断する質問紙を小冊子としてまとめた。

事件 複数の目撃者が存在する可能性があり、裁判で様々な属性の証人が証言をすることが不自然ではないような架空の事件 (Appendix 1) を、刑法学者の助言を受けて設定した。

裁判の争点 裁判の争点 (Appendix 2) を刑法学者の協力を得て作成した。

証人の信用性を判断する質問紙 Peled et al. (2004) を参考にして、質問紙を作成した。証人の属性は、年齢 (3, 5, 10, 15, 50, 70 歳)、人種 (白人, 黒人, アジア系, イスラム系)、障がい (視覚障がい, 聴覚障がい, 発達障がい, 知的障がい)、容姿 (好ましい, 好ましくない)、社会的地位 (高い, 低い) の5つの属性カテゴリ、計18項目であった。証人の信用性が低くなると予想される属性だ

⁵ 参加者には“証言”の信用性を判断させたというよりも、“証人”の信用性を判断させたといえる。そこで、本研究では“証言”の信用性と記載せずに、“証人”の信用性と記載した。

⁶ 裁判員制度では、裁判員は大学生及び大学院生を含む市民 (20 歳以上) から選任される。したがって、大学生及び大学院生を対象として行う本研究で得られる知見は、実際の裁判場面での裁判員の判断の特徴を予測することに役立つと考えられる。また、先行研究では大学生に調査への参加を依頼することが多い (e.g., Ross et al., 1990)。

けを取り上げるのでは、参加者に証言の信用性を高く判断してはならないという印象を与えてしまい、そのことが参加者の回答を変化させる恐れがあると考えられた。このことを防ぐため、証言の信用性が高くなると予測された属性もいくつか含めた。また、各属性カテゴリの基準となる属性を、年齢は20歳、人種は日本人、障がいなし（健常者）、容姿は平均的、社会的地位は平均的とした。各属性の信用性を調べるために、属性ごとに「基準とした属性（例：20歳）の目撃者の証言の信用性を50%とした時、特定の属性（例：5歳）の目撃者の証言がどの程度信用できるかをお答えください」と紙面上で教示し、0%（信用できない）から100%（信用できる）の間で選択させた⁷。参加者がどのように信用性を判断したのかを調べるために、属性ごとに判断理由の自由記述欄を設けた。質問紙においては、属性カテゴリ内の属性の記載順はランダムとした。また、各属性カテゴリの回答順も、参加者間でランダムとした。

手続き

調査はすべて個別に行われた。まず、第1著者は参加者に対して、調査の目的、調査上のリスク及び個人情報の管理などを説明し、参加の承諾を得た。その後、第1著者が参加者に、上記の小冊子を配布し、小冊子を記載されている指示に従い回答するよう教示した。その際、参加者には様々な属性の目撃証人が法廷で証言する場面を想定するように求めた。以後は、参加者のセルフペースで行われた。参加者は事件、裁判の争点の順に読み、属性ごとに信用性を判断し、その判断理由を記入した。1つの属性への回答が終わると、次の属性の回答へと進んだ（例：3歳の次に5歳など）。全ての属性への回答を終えたところで調査を終了とした。所要時間はおよそ30分から40分であった。

結果

属性間の信用性の比較

判断対象となる属性を持つ証人の信用性が基準（50%）と比べてどの程度低く/高く判断されたのかを調べるため、両者の差分を算出した。したがって、信用性は最高値50%、最低値-50%であった。この値がマイナスの場合、信用性は基準よりも低いといえる。各属性の信用性が、基準と比べて統計的に低い高いのかを調べるため、検定値を0として1標本 t 検定を行った。有意水準は5%とした。

⁷ 本研究では、参加者が考える属性間の信用性の僅かな差を反映できるようにするため、選択肢をパーセントとした。始点を0%、終点を100%とした水平線上に5%間隔で選択肢（例：5%、10%）を設け、参加者には該当する数字を○で囲ませた。

証人の信用性の平均値、標準偏差を信用性が低い属性から順に Table 1 に示す。以下、1 標本 t 検定の結果を属性カテゴリごとに記す。

年齢 3 歳, 5 歳, 10 歳, 15 歳, 50 歳, 70 歳の全属性において有意差が見られた ($t(39)=18.30, p<.001$; $t(39)=12.82, p<.001$; $t(39)=8.62, p<.001$; $t(39)=2.51, p<.05$; $t(39)=3.10, p<.005$; $t(39)=5.37, p<.001$)。3 歳, 5 歳, 10 歳, 15 歳, 70 歳の信用性は 20 歳の信用性よりも低く, 50 歳の信用性は 20 歳の信用性よりも高かった。

人種 白人, 黒人, アジア系, イスラム系の全属性において有意差が見られた ($t(39)=2.72, p<.05$; $t(39)=2.71, p<.05$; $t(39)=4.13, p<.001$; $t(39)=4.11, p<.001$)。全属性の信用性は日本人の信用性よりも低かった。

障がい 視覚障がい, 聴覚障がい, 発達障がい, 知的障がいの全属性において有意差が見られた ($t(39)=9.30, p<.001$; $t(39)=5.88, p<.001$; $t(39)=11.64, p<.001$; $t(39)=14.27, p<.001$)。全属性の信用性は健常者の信用性よりも低かった。

容姿 容姿が好ましい場合, 好ましくない場合の両方において有意差が見られた ($t(39)=3.12, p<.005$; $t(39)=3.63, p<.005$)。容姿が好ましい証人の信用性は容姿が平均的な証人の信用性よりも高く, 容姿が好ましくない証人の信用性は容姿が平均的な証人の信用性よりも低かった。

社会的地位 社会的地位が高い場合に有意差は見られなかったものの, 低い場合において有意差が見られた ($t(39)=2.22, p<.05$)。社会的地位が高い証人の信用性は社会的地位が平均的な証人の信用性と同程度であり, 社会的地位が低い証人の信用性は社会的地位が平均的な証人の信用性よりも低かった。

次に, 全属性間で信用性に差が見られるのかどうかを検討するため, 18 項目の属性を参加者内要因とした 1 要因分散分析を行った。多重比較にはボンフェローニ法を用いた。有意水準は 5% とした。1 要因分散分析の結果, 属性の主効果が見られた ($F(17, 663)=62.93, p<.001$)。多重比較の結果を Table 1 に示す。Table 1 には, 各属性間の信用性の差を記載し, その差が有意である場合にはアスタリスクを記した ($**p<.01, *p<.05$)。

信用性が低い/低くない属性の選択

信用性が特に低い属性の特徴について調べるため, 信用性が特に低い属性, その対比となる信用性が低くない属性をそれぞれ選択した。Table 1 を確認すると, 信用性が低い属性の多くが年齢, 障がいに関する属性であった。そこで, 信用性が特に低い属性を両方の属性カテゴリから 1 つずつ選択した。年齢では 5 歳 ($M=-24.88, SD=12.27$), 障がいでは知的障がい ($M=-25.08, SD=11.12$) を選択した。年

Table 1

証人の信用性の平均値、標準偏差、属性間の信用性の差

属性	平均値	標準偏差	3歳	知的障がい	5歳	視覚障がい	発達障がい	10歳	聴覚障がい	70歳	アジア系	イスラム系	黒人	白人	15歳	好ましくない	低い	高い	好ましい	50歳
3歳	-32.75	11.32	0																	
知的障がい	-25.08	11.12	7.68 **	0																
5歳	-24.88	12.27	7.88 **	0.20	0															
視覚障がい	-21.25	14.44	11.50 **	3.83	3.63	0														
発達障がい	-18.81	10.22	13.94 **	6.26	6.06	2.44	0													
10歳	-13.63	10.00	19.13 **	11.45 **	11.25 **	7.63	5.19	0												
聴覚障がい	-10.94	11.76	21.81 **	14.14 **	13.94 **	10.31 **	7.88 *	2.69	0											
70歳	-7.38	8.70	25.38 **	17.70 **	17.50 **	13.88 **	11.44 **	6.25	3.56	0										
アジア系	-5.75	8.81	27.00 **	19.33 **	19.13 **	15.50 **	13.06 **	7.88 **	5.19	1.63	0									
イスラム系	-5.25	8.08	27.50 **	19.83 **	19.63 **	16.00 **	13.56 **	8.38 *	5.69	2.13	0.50	0								
黒人	-4.25	9.91	28.50 **	20.83 **	20.63 **	17.00 **	14.56 **	9.38 **	6.69	3.13	1.50	1.00	0							
白人	-3.88	9.02	28.88 **	21.20 **	21.00 **	17.38 **	14.94 **	9.75 **	7.06	3.50	1.88	1.38	0.38	0						
15歳	-2.88	7.24	29.88 **	22.20 **	22.00 **	18.38 **	15.94 **	10.75 **	8.06 **	4.50	2.88	2.38	1.38	1.00	0					
好ましくない	-2.75	4.80	30.00 **	22.33 **	22.13 **	18.50 **	16.06 **	10.88 **	8.19 **	4.63	3.00	2.50	1.50	1.13	0.13	0				
低い	-2.25	6.40	30.50 **	22.83 **	22.63 **	19.00 **	16.56 **	11.38 **	8.69 **	5.13	3.50	3.00	2.00	1.63	0.63	0.50	0			
高い	1.13	7.97	33.88 **	26.20 **	26.00 **	22.38 **	19.94 **	14.75 **	12.06 **	8.50 **	6.88	6.38	5.38	5.00	4.00	3.88	3.38	0		
好ましい	2.50	5.06	35.25 **	27.58 **	27.38 **	23.75 **	21.31 **	16.13 **	13.44 **	9.88 **	8.25 **	7.75 **	6.75 *	6.38 *	5.38 **	5.25 *	4.75	1.38	0	
50歳	4.38	8.93	37.13 **	29.45 **	29.25 **	25.63 **	23.19 **	18.00 **	15.31 **	11.75 **	10.13 *	9.63 *	8.63	8.25	7.25	7.13 *	6.63 **	3.25	1.88	0

(注) **は1%, *は5%水準で有意な差があることを示す。

年齢カテゴリで信用性が最も低かった属性は3歳であった ($M=-32.75, SD=11.32$)。ただし、3歳については、3歳児が法廷で証言するのかという疑問を呈した参加者もいた。3歳児が法廷で証言する場面を想定することができなかった参加者がいたことを踏まえて、3歳の次に信用性が低い5歳を選択した。一方、5歳と知的障がい者の対比となる信用性が低くない属性として、70歳 ($M=-7.38, SD=8.70$) と聴覚障がい者 ($M=-10.94, SD=11.76$) を選択した。年齢カテゴリで信用性が基準よりも低く、かつ基準に最も近い属性は15歳 ($M=-2.88, SD=7.24$) であった。ただし、1要因18水準の分散分析の多重比較の結果、15歳と基準よりも信用性が高い50歳 ($M=4.38, SD=8.93$) との間に有意な差が見られなかった。このことを踏まえて、15歳の次に信用性が低く、50歳よりも信用性が有意に低かった70歳を選択した。

判断理由の整理

判断理由を分類するため、第1著者と第2著者が、上記の4属性に対して参加者が挙げた判断理由を確認し、その中で類似している理由をまとめていき、7つの理由タイプを作成した。この7つの理由タイプは、状況理解、記憶、言語、被暗示性、証言を聞く側の問題、その他の具体的理由、具体的理由なし（同語反復や「なんとなく」など）であった。理由タイプの典型例をTable 2に示す。

次に、参加者40名の50%にあたる20名が挙げた判断理由について、第1著者と参加者ではない心理学を専攻する大学生1名が、先に作成した7つの理由タイプに基づいて、個別にコーディングを行った。参加者が挙げた1つの理由に対して、複数の理由タイプが該当するとコーディングされたものもあった。その場合、第1著者と判定者の回答が完全に一致している場合のみを“一致”とみなし、一部のみ一致している場合（例：第1著者は、状況理解、記憶の2つを回答したが、判定者は記憶のみを回答した）及び全て一致していない場合を“不一致”とした。コーディングの一致率は82.50%で

Table 2
理由タイプの典型例、各属性における理由タイプの割合

理由タイプ	典型例	5歳	70歳	聴覚障がい	知的障がい
状況理解	状況が理解できていない	.17	.42	.58	.24
記憶	記憶力が劣る	.09	.36	-	.09
言語	言語を理解できない	.30	-	.05	.24
被暗示性	周りの大人から言われたことに多少は影響を受ける	.11	-	-	.02
証言を聞く側の問題	目撃者の意図を完全に理解できないと思う	.02	-	-	.02
その他の具体的理由	社会的責任を持って答えられそう	.06	.13	-	.04
具体的理由なし	なんとなく信用しづらい	.26	.09	.37	.33

注) 少数点第三位を四捨五入したため、理由タイプの割合の合計が1.00にならない属性もある。理由タイプの割合がゼロの場合にはハイフン (-) で示した。

あった。この結果を受けて、第1著者による判定が妥当なものであるとみなし、全参加者の判断理由のコーディングを第1著者が単独で行った。

信用性が低い/低くない属性の判断理由に見られる特徴

選択した4つの属性の特徴を調べるために、各属性の判断理由に占める7つの理由タイプの割合に注目した。1つの理由タイプにつき1点とし（1名の判断理由の中で3つの理由タイプが挙げられていれば、3点とした）、属性ごとに合計点を算出した。次に、この合計点を1.00として、各理由タイプの割合を計算した。その結果をTable 2に示す。ただし、特定の属性で信用性を基準よりも高く判断した参加者の判断理由（70歳の2データ、聴覚障がい者の3データ）については理由タイプの計算から除外した。Table 2を確認すると、5歳と知的障がいでは、複数の理由タイプが挙げられたが、70歳と聴覚障がいでは、挙げられた理由タイプの種類が少ないようであった（具体的理由なしを除いて、順に6, 6, 3, 2種類）。また、5歳、70歳に比べて、聴覚障がい、知的障がいでは具体的な理由なしの割合が相対的に高いようであった（順に.26, .09, .37, .33）。以上を踏まえて、選択した4つの属性の特徴をFigure 1に示す。

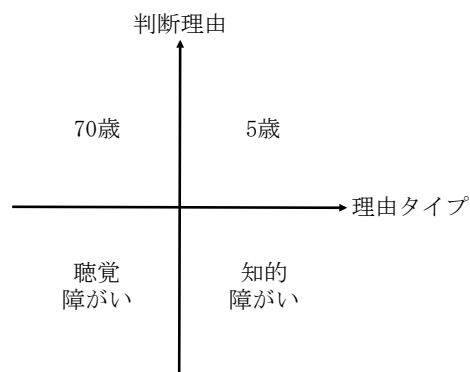


Figure 1. 判断理由による属性の分類

注) 矢印の先端に向かうほど、判断理由及び理由タイプが多いことを示す

考 察

本研究では、年齢（3, 5, 10, 15, 50, 70歳）、人種（白人、黒人、アジア系、イスラム系）、障がい（視覚障がい、聴覚障がい、発達障がい、知的障がい）、容姿（好ましい、好ましくない）、社会的地位（高い、低い）の5つの属性カテゴリ、計18項目の属性の信用性を調べた。加えて、信用性が特に低い属性の特徴を、信用性が相対的に低くない属性との比較を通して探索的に検討した。参加者には、様々な属性の証人が法廷で証言する場面を想定してもらい、各属性の証人が基準とした属性の証人に比べてどの程度信用できるかを判断させた。また、その判断理由についても回答させた。

各属性の信用性と基準とした属性の信用性を比較した結果、50歳、容姿が好ましい証人は基準よりも信用性が高く、社会的地位が高い証人は信用性が基準と同程度であり、その他の属性は基準よりも信用性が低かった。本研究の大多数の結果は、様々な属性の証人の証言の信用性が、基準とされた属性の信用性に比べて低い高いことを報告した先行研究（e.g., Ross et al., 1990; Jules & McQuiston, 2013; Frumkin, 2007; Stobbs & Kebbell, 2003）と一致する。また、先行研究において、基準とされた属性に比べ

て信用性が低く/高くなると考えられていた容姿 (FifeSchaw, 1995) については、本研究により実証されたといえるであろう。ただし、社会的地位が高い証人に関する結果は先行研究と一致しなかった。先行研究では、証人の社会的地位の高さを、具体的な職業 (例: 医者) を設定することで操作し (e.g., Jules & McQuiston, 2013), 社会的地位が高い証人の信用性は基準よりも高く判断されることが示された。本研究の結果を踏まえると、証人の社会的地位が高いことを参加者に明示したことが、その属性の影響を抑制したのではないかと考えられる。なお、50 歳の信用性については、証人の年齢に着目した先行研究において未検討であった。本研究は、50 歳の信用性が 20 歳の信用性よりも高く判断されるという新たな知見を提供したといえる。

本研究で設定した 18 の属性間で信用性を比較したところ、各属性の信用性は以下のような順となった。まず、3 歳、5 歳、10 歳、70 歳の証人、障がいのある証人は、信用性が特に低く判断されることが示された。次に、日本人でない各証人の信用性はいずれも同程度に低く判断されることがわかった。信用性が相対的に低く判断されなかったのは、容姿や社会的地位に関する属性を持つ証人、15 歳、50 歳の証人であることが明らかになった。これまでの研究では、研究ごとに事件や属性が設定されて、特定の属性で証言の信用性が低く判断されることが示されてきた。ただし、研究ごとに設定された属性間の信用性は比較されてこなかったため、どの属性の信用性が低いのかは不明であった。本研究では、同一事件の目撃者として、様々な属性の目撃証人が法廷で証言をする場面を設定し、参加者に様々な属性の信用性を判断させた。これにより、属性間の信用性を比較することが可能となり、どの属性の信用性が相対的に低いのかを明らかにした。本研究は、目撃証言の信用性判断に関する研究、特に、証人の属性に着目した研究を行う際に、研究の目的に適した属性を選択する指針となるデータを提供したと思われる。

信用性が特に低い属性 (5 歳、知的障がい) の特徴を掴むため、そうでない属性 (70 歳、聴覚障がい) と判断理由を比較した結果、5 歳、知的障がいでは、70 歳、聴覚障がいに比べて、複数の理由タイプを挙げられることが示された。これは、信用性が特に低い属性 (5 歳、知的障がい) では、その属性の多様な面が信用性に関与すると考えられたためではないかと推測される。また、5 歳、70 歳に比べて、知的障がい、聴覚障がいでは、具体的な理由を多く挙げられない傾向が示された。これは、その属性に関する知識がないことが一因として挙げられるであろう。実際に、具体的な理由を相対的に多く挙げられた 5 歳や 70 歳に着目してみると、参加者にとって、5 歳は自身が経験しており、また、70 歳は彼らの祖父や祖母にあたる年齢であることが推測され、5 歳や 70 歳についての知識を持っていたのではないと思われる。一方、知的障がいや聴覚障がいは、5 歳や 70 歳よりも日常的な接触が少ないと推測され、5 歳や 70 歳に比べて属性に関する知識を持っていなかったと考えられる。以上より、

信用性が特に低い属性は、その属性に関する知識があるかどうかによらず、その属性の多様な面が信用性に関与すると考えられるという特徴があると推測される。この特徴は、証言の信用性が低く判断される要因の1つとして捉えることもできると思われる。

最後に、今後の研究で検討すべき課題について述べる。本研究では、基準とした属性の証人の信用性を50%に設定し、参加者には各属性の証人が基準とした属性の証人に比べてどの程度信用できるかを判断させた。本研究の結果の大部分が、先行研究の結果と一致したことを踏まえると、上記の方法は適当であったと考えられる。ただし、今後は、本研究で基準とした属性も含めた、様々な属性の証人の信用性を個別に判断させた場合、本研究と同様の結果が得られるかどうかについても検討し、本研究で得られた知見の頑健性を確認することが必要であろう。

本研究は、これまでの研究では不明であった、様々な属性の中で、どの属性の信用性が相対的に低いのか、信用性が特に低い属性の特徴は何かを明らかにしたものであり、本研究で得られた結果は、証言の信用性が低く判断される統一的な過程の解明に役立てられると期待される。

引用文献

- Bruer, K., & Pozzulo, J. D. (2014). Influence of eyewitness age and recall error on mock juror decision-making. *Legal and Criminological Psychology*, 19, 332-348.
- FifeSchaw, C. (1995). The influence of witness appearance and demeanour on witness credibility: A theoretical framework. *Medicine Science and the Law*, 35, 107-116.
- Frumkin, L. (2007). Influences of accent and ethnic background on perceptions of eyewitness testimony. *Psychology, Crime & Law*, 13, 317-331.
- Goodman, G. S., Golding, J. M., Helgeson, V. S., Haith, M. M., & Michelli, J. (1987). When a child takes the stand: Jurors' perceptions of children's eyewitness testimony. *Law and Human Behavior*, 11, 27-40.
- Jules, S. J., & McQuiston, D. E. (2013). Speech style and occupational status affect assessments of eyewitness testimony. *Journal of Applied Social Psychology*, 43, 741-748.
- Peled, M., Larocci, G., & Connolly, D. A. (2004). Eyewitness testimony and perceived credibility of youth with mild intellectual disability. *Journal of Intellectual Disability Research*, 48, 699-703.
- Ross, D. F., Dunning, D., Toglia, M. P., & Ceci, S. J. (1990). The child in the eyes of the jury: Assessing mock jurors' perceptions of the child witness. *Law and Human Behavior*, 14, 5-23.
- Stobbs, G., & Kebbell, M. R. (2003). Jurors' perception of witnesses with intellectual disabilities and the influence of expert evidence. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*, 16, 107-114.

Appendix 1

事 件

20××年〇月〇日の午後6時頃、〇〇市〇〇町の交差点で、信号待ちをしていた女性が泥酔した男性にしつこく絡まれていた。男性は女性に対して頭を小突いたり罵声を浴びせたりした。女性は当初はこうしたからかいを無視していた。しかし、男性が両手で女性のコートを掴んできたため、女性は男性の身体を振り払った。そして、男性は体勢を崩して車道に倒れた。男性が歩道に戻ろうとしたところ、信号が変わって侵入してきたトラックと接触し即死した。その場にいた他の多くの人々は一連の男性の行為に対し無関心であり、救助もしなかった。

Appendix 2

裁 判 の 争 点

女性が男性を振り払ったとき、この女性に正当防衛の認識がわずかでもあったかどうか。

女性が自分の身体を守るために、男性を振り払い、この男性を死なせてしまったことは、やりすぎであったかどうか。

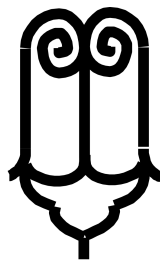
Judging the credibility of eyewitnesses with different attributes

Yasuyuki NABATA (*Department of Psychology, Hokkaido University*)

Makiko NAKA (*Department of Psychology, Hokkaido University*)

The purpose of this study was to investigate the credibility of eyewitnesses with different attributes. Eyewitness attributes were age (3, 5, 10, 15, 50, and 70 years), race (White, Black, Islamic, and Asian), disability (visual, hearing, developmental, and learning), appearance (good-looking and not-good-looking), and social status (high and low). Forty participants judged the credibility of all attributes compared with the standard attributes (e.g., 20-year-old, Japanese) and supplied the reasons for their judgment on the question sheet. The results showed that the credibility of the attributes presented was lower than that of the standard attributes, with the exception of 50-year-old, good appearance, and high social status. Participants gave many kinds of reasons for judging some attributes as having particularly low credibility (5-year-old, learning disability) compared with the higher-credibility attributes (70-year-old, hearing impairment). Thus, this study provided data about the credibility of eyewitness with different attributes, which will be useful to the study of judging the credibility of eyewitness testimony.

Key words: eyewitness, credibility, attribute



<http://cogpsy.let.hokudai.ac.jp/>

DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY
HOKKAIDO UNIVERSITY
N-10 W-7, SAPPORO 060-0810, JAPAN

心理システム科学講座
北海道大学大学院文学研究科
060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目